

和 紙 の 源 流 ～歴史地理学的研究No.1～

林 正 己

The Origin of the Washi ～A study of Historical Geograpy No. 1～

Masami HAYASHI

There are three opinions about the origin of the Making the Washi (Japanese paper); The First of them is that was brought by Donchō AD.610. He and his parties lived under the protections of the Yamato Court and they made the washi.

They came to Japan in official way.

The second, many foreigner came from China and Korea at the time the ruin of their countries, and privately landed on Japan, especially on the coast of the Japan sea.

They lived on the village among the mountains, and they taught their art of making paper.

That is, it was the informal way to Japan. This origin is older than the former, that is AD.610.

The third, the mast typical one is that the Japanese paper had been already produced earier than AD.610. The God of the paper is enshrined in Tokushinia prefecture now.

1. 紙 の 語 源

字源辞典によると紙とは「生糸で織ったなめらかな布」となって「氏」がこの音を表わしている。この「し」の音の表わす意味は「砥」のなめらかなの意味である。後漢の蔡倫が古布を用いて漉き、これを同じく紙と呼んだとされ今日の「紙」のはじめである。

しかし、大言海によると

簡の字音の かね、かに、かみ と転じたものとされていて、簡、竹簡也 古来有紙、載文干、簡、謂之簡札とある。

いずれにしても紙の語源として注目されるものであるが、前者の語源はその製品の実態に由来するのに対し、後者はその材料としての竹簡に由来しているというものである。

かくして上古にあっては「楮の皮を剥ぎ粗皮を徐去し、煮て細かに打碎きとろろあふひの根の粘液と水とを加えて簀の上に甚だ薄く敷きて乾して成る」かくしてでき上ったものを紙と称するに至ったものであろうが、もともと文字がかき易いものであればよいのであって、当初貴重な生糸でつくった絹が使用されていたことを字源辞典は物語っている。しかし、絹そのものは上代においても高価貴重なものであったようで、それが蔡倫によって樹皮・ぼろ布・魚網などにより作られたので紙の大衆化が始まり、そのために彼が始祖とまでいわれるようになったと考えられる。かくて紙といえは今日のように繊維を材料としたものを呼称するようになったものであろう。

2. 和紙の始源

和紙の始源についてはいうまでもなく、大陸からの伝来によるものが主流となっている。

その結果、全国各地においてその技術を導入して、それぞれ特色あるものが造り出されるようになったのは、歴史的にも明らかである。

しかるに、全国の和紙産地で注目されるのが、古代神大日鷲命おおひろめのみことを和紙の祖神として祭る忌部神社いみべが現存している地区¹⁾があることである。

これら大きく対立する始源説の中で、前者に属するものも、その渡来伝播の仕方によって異なるものが考えられる。すなわち、朝鮮半島における国の興亡に呼応して、亡命帰化人として大和政権の庇護のもとに特定の地をえて住みつき、それぞれの技能・技術のもとに生業を始めたものの中に、製紙の技術に長じたものがいて、これらの人々が各地でそれぞれ特色ある和紙造りに従った。

しかし、このように正式のルートで渡来したもののほか、故国の動乱に乗じて秘かに日本列島に安住の地を求めてきたであろう集団があったこともまた当然予想される。彼らはことさら山間僻地を求めて、そこに生活の場をかまえながら、周辺に自生する野草を原料にする和紙生産を始めたとする3つの始源論が一応なり立つ。

3. 紙の伝来～正式ルートで

紙が伝来したのを一応610年とし、“高句麗の僧曇徴が来朝し、紙・墨・彩色の製法を伝える”ということになっているが、このとき始めて紙の製法が伝来したことは断定し難い。それはそれまでに大陸と無縁であったならそれも肯定できるが、すでに日本は大陸、半島との公の交流はもちろん私的交流も想像以上に頻繁だった。

さらに105年後漢の宦官蔡倫によって紙がはじめて造られたといわれてきたが、最近になって蔡倫以前のものである紙が発見され、彼を紙の発明者とすることも疑わしくなっているが、そのことは紙の出現がもっと古くその後次第に改良が加えられてきたことを物語るものである。

それと同時に、かかる紙文化が半島にそして日本に渡っていったことは、次のことから考えられる。

すなわち、漢民族の半島部への進出が始まったのは、前漢の武帝のときで、衛氏朝鮮を滅ぼし（前108年）朝鮮半島に、楽浪・真番・臨屯・玄菟の四郡をおく。さらに、（前82年）真番・臨屯二郡を廃し、玄菟郡を西に移す。（年表日本歴史 p. 64）

このことは、紀元前後すでに半島は漢の政治的軍事的支配の下にあったことが分る。それに伴って当然漢人支配の半島国家に紙づくりの技術が入ってくるのは当然と考えられる。

さらにこの時代、日本はこの楽浪郡と交渉をもっていた。

このことを漢書地理志は紀元前後“この頃倭人（日本人）は百余りの国に分かれ、その一部は漢の楽浪郡と交渉をもつ”とするしている。このことは同時に漢の文化が日本にすでに渡るきっかけとなっていたことを示していると考ええるものである。

さらにA. D. に入ってこの傾向は、一段とたかまったであろうことを示している。すなわち、A. D. 57年、倭の奴国王が後漢に朝貢して 光武帝より印綬を受ける～（年表日本歴史 p. 65）

さらに（107年）～倭国王 師升ら後漢に生口 160人を献ずる。～（年表日本歴史 p. 65）

しかしA. D.3に入ると、後漢にも変化がみられ最後の献帝は、魏に皇帝の位を受けるといふ政変が起った。

それに対して日本は直に反応を示している。すなわち、魏志倭人伝によると（239年）～女王卑弥呼、大夫の難升米・次使都市牛利ら帯方郡（楽浪郡を分けてつくられた郡）に遣わし、魏の明帝に朝献したいと求める。～年表日本歴史 p. 67～

このことは当時の日本がいかに関大陸の政治状況に敏感であったかがわかる。

この願いに応じて帯方郡の郡太守が日本からの使者を洛陽に送っている。また、この交渉において注目されるのは、いわゆる“紙らしきもの”が日本人の眼に映じたと考えられるものとして魏志倭人伝 240年には次の記事がある。～（年表日本歴史 p. 68）～

“帯方郡太子 弓遵、建中校尉梯儻らを遣わし、詔書・印綬を奉じ、倭国に詣り、倭王に詔をもたらし、錦・刀・鏡などを賜わる”

このとき帯方郡太子がもたらした詔書はそれが何に書かれていたかは定かでないとしても、紙もしくはそれに準じたものであったに違いない。そのことは記録に残っている最初のものといふことができる。

しかし、4世紀に入ると朝鮮半島には大きな政変が起ってくる。すなわち、（313年）～高句麗楽浪郡を併合する。帯方郡も滅亡する。その後、百濟、新羅建国す。～（年表日本歴史 p. 78）

この百濟、新羅の出現はその後、日本と密接な関係～文化的軍事的～に入り、その文化・文物の渡来を決定的にし、日本も大陸・半島の文化圏に入ってきた。すなわち、4世紀の後半から、7世紀半島も大陸も争乱の時代が展開することになる。

ことに、百濟の国の興亡盛衰が日本に与えた影響は大きい。そして、百濟から多くの文物が帰化人の手を通じてすでに渡来していたことが考えられる。

同時に大陸においても、国家の盛衰がはげしく推移してゆく中に、当時の日本の政権は親善使節を派遣している。その使節が持参する国書なるものが注目される。ことに、推古15年（607）の

頃に、

～“小野妹子らを随に派遣す。「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す恙無きや」”～と国書に記し、天子の称号を名のって煬帝を怒らせる。～（年表日本歴史 p. 96）～

同じように、国書は翌 608年第三次遣随使にも託された。

このようにみると“推古18年(610)高句麗僧曇徴 絵具・紙・墨の製法を伝える”という渡来僧による紙の製法が初めて日本に伝ったというのは、無理があるように思われる。いうまでもなく、それ以前に日本と半島はもちろん、大陸との間には密接な往来が繰り返られていたので、当然紙の輸入も存在していたであろうし、またこれを製造することに関心を示したことが考えられる。ただ、曇徴がたまたま紙の製法にも長じていたことは、それまでの紙の生産技術の進歩、改善に貢献したことが大きく、それゆえに歴史に残ることとなっているものであろう。

さらに高句麗、百濟、新羅の盛衰興亡はその後もつづき、そのたびに多くの帰化人が渡来し、当時の政権により定住地を与えられて、そこで新しい帰化人の村が近畿各地にできた。弘仁元年(815)の新撰姓氏録には 324の渡来人の姓が記載されている。（漢人系162, 百濟系102, 高句麗系41）

紙の日本渡来は曇徴の来朝に始まるというのが通説であるとしても、その以前に前述したような大陸・半島との人と物の往来があったことを考えるとき、ことに政権の交代・興亡に伴って多くの人たちが海外に亡命を求めていることも当然考えられ、それらの中に製紙の技術者もあったことは考えられる。このようにして、日本の紙生産がそれぞれ各地に定着していったものであって、聖徳太子の勝鬘経義疏(611年)、維摩経義疏(613年)等の著作もこのような紙の生産が、この当時、相当の段階にあったことがしのばれる。

4. 非公式なルートでの紙の伝来

前述のようないわゆる正式ルートで大和政権の庇護のもとに渡来した大陸・半島からの渡来人のほか、当時の大和政権の支配下に属していなかった日本海岸にも、その出身所属をこととする亡命者たちが流れついたであろうことは当然考えられる。能登の気比神社における唐酒之宮、さらに金沢市二日市のはじかみ神社²⁾の存在にも渡来した人々のもたらしたもののあったことを物語っているが、福井県今立町にある岡太神社³⁾もそのひとつと考えられている。すなわち、この越前の地に紙の製造が始まったのは、6世紀頃と推定されるがこれは継体天皇がいまだ越前におられたときのことで次の伝承がいまも語り伝えられている。すなわち川上御前によって、製紙の技術を教えられたこの地の人たちが、和紙の生産を始めたというものである。この川上御前なるものは、半島の争乱によって亡命してきた集団の長と考えられる。しかも当時の大和政権の支配に属していなかったこの越前の地に夜分に上陸し、山間に安住の地を求めてきたものであろう。ことに、越国には多くの豊かな紙の原料があり、しかも紙の製造に欠くことのできない良質の水に恵まれているなど、その立地条件を備えていたことも、この地が和紙生産の先進地として発展してきた理由である。そして越前を中心に、全国各地に紙の生産が次々と伝えられていった。

ことに仏教の伝来、その発展が紙の生産技術を発展させ、またその国内各地に紙産地を形成していった。今日なお残る和紙産地は、加賀、能登、越中、越後の各地にみられるが、なかでも越中五箇山の和紙は越前五ヶ村（今立町）から伝ったといわれている。

5. 和紙の日本始源論

以上の紙の生産が外来に起因するものといわれるのに対し、紙の始祖として天日鷲命とする説が次のようにみられる。

- (1) 経済要録卷十⁴⁾によると古語拾遺の岩戸隠れの条に、天日鷲神が穀木を植えて、白和幣を^{しろにきて}らせたとある記事について「穀木はすなわち楮樹のことにして、古はこの木の白布を木綿と名づけて、白和幣の^{しろにきて}神衣を織りたるものなれば、紙を漉き出させしも、この時代を距ることを遠かるまじく思わるなり。紙もまた蚕および麻と同等のものにして、その起源は神の漉き初めたまいしなるべきを察するに足れり」
- (2) 古今要覧稿卷二⁵⁾によると「津咋見神をして穀、木綿を植えしめ以って白和幣をつくり、また粟忌部祖天日鷲命をして木綿を造らしむ」とある箇所を引用して「穀は紙にすく木なり。また、この書に木綿というは麻の如く皮を摩剥して、とり垂れたるなり。その摩剥したる皮を水に浸し、漉きあげて薄くしたる紙とゆうなり。よりて思うに皇国のくしき神代にして、繭をとり糸をひきては他国にすぐれたる絹布を自ら織りそめさることなどあるを紙すくことも皇国のいにしへになくしてはあべき」とある。
- (3) 江戸東京紙漉史考⁶⁾によると紙祖神について次の記事がある。すなわち「皇国にて紙のこの見え始めたは『日本書紀』推古天皇御巻に、18年3月、『高麗王貢上僧曇徴・法定 曇徴知五経、且能作彩色及紙墨』とあるぞはじめなる。

但し、これは紙を製することの精しきをいえるにて、紙とゆうものこのときに始まれりとは聞えず。すでに応神天皇の御世に百済国より論語、千字文を貢獻し、和述、吉師も参れしは書をするすことなかるべからず。

すなわち、宇遲皇子和述を師とし学び給い作らせ給える御詩、懷風藻に出たり。

また、履中天皇4年秋8月始之於諸国、置国史、記言こともある。

皆推古天皇より遙に古し。況て神代文字ありて記せしとせんには論をまたず。

和名抄に色紙・檀紙・穀紙・紙屋紙・河苔紙・斐紙等の名あり。延喜式に麻紙・穀紙見ゆる。皆皇国に製せる紙なり。

但し、皇国にて紙を造り始めた時及び造り始めた人は詳ならず。今おもうに、紙の祖神としていつき奉らんとすれば、天日鷲命ぞよかるべき。

さるは紙は上文に引出したる如く、檀紙・河苔紙・斐薄紙・麻紙などあれど、今は専ら穀紙のみ也。穀は和名抄に玉篇に云、楮穀木也。唐韻云、穀は木名也。和名加知と見え楮とゆうも同物にて、後世カウゾノ木と云、古は多く布に織りたる物なれど、今は紙に製するを常とす。この穀木をはじめて植え給える神、すなわち天日鷲命なり。

古語拾遺に『令天日驚神，以津咋見神，穀木種殖，之以作白和幣』と見えたり。

比神は阿波国忌部祖にて，阿波国麻殖郡忌部神社，すなわち，式内にて比神をいっきまつるなり」とあることは注目される。

また，次の記事はわが国の紙墨の歴史上注目される。すなわち

- (4) 天明墨談卷之四⁷⁾によると『日本書紀推古天皇の御卷に日く18年春(610)高麗王眞土僧曇徴・法定。曇徴知五経且能作彩色及紙墨。先達大かた是ぞ我国にて紙墨を作りし始めなりといえども，是はただこの僧，能く紙墨を作りしにてこれを始めとは極めがたし。書籍渡りて数百年の後なればこれより前に紙墨は作りけるなるべし。

されど，この伝に習いていよいよよき紙などつくり出しけむ。その作るわざは，彼に習うといえども，この国にて作れるは，またこの国の風そなわりてうるわしくみずしき紙墨も作り出るなりけり』

このことは曇徴来朝以前に国の風にそなわりたる美しくみずみずしき紙があったとしている。

以上の諸説にも明らかなように，紙は古くから曇徴来朝以前から存していたということである。

このような説に対して，きわめて注目される伝承が徳島県麻植郡山川町に残っている。いうまでもなくその郡名“麻植”こそ古代神を祭った忌部氏が和の地から求め求めてこの阿波国（粟国）にて，ようやく豊かな麻の繁るところを発見し，ここに居を構えたという。

その忌部氏の氏神としての忌部神社が，徳島県内に二社現存している。そのひとつは徳島市，～かつての阿波国全域の忌部氏の氏神～にある。

すなわち，徳島市二軒屋町に鎮座する忌部神社と前記麻植郡山川町忌部山に鎮座する忌部神社とが注目される。

そもそも忌部神社は忌部氏の氏神であることはいうまでもないが，これは太古穀麻を植えて製紙・紡績の業を興した祖神大日驚命の神徳をたたえて，麻植の神としてお祭りしたものである。また，この神に奉仕する忌部氏は国家の祭祀を司っていた。

以上二つの忌部神社の中で，山川町にあるものはまさに，今日まで忌部氏の伝統をとどめている。それは和紙生産がいまにつづいていることにも示される。

そのほか川田町には，上古の伝承をもつ地名がみられる。

1. 高越山 山川町の西南にある霊山となって，古くから信仰の対象となっていて，その形から衣笠山，阿波富士ともいわれる標高1,123メートル。山頂には天日驚命をまつる高越神社がある。この高越山について吉田東伍博士の解説が注目される。すなわち，⁸⁾「高越山は穀山の義にして穀を加知また加宇曾と訓む。忌部の祖が殖麻やるは蓋しこの辺とす。和訓栞に云う。新撰字境式に穀または楮を『カジ』と訓せり。同注にいう延喜式に『風造紙 煮穀皮』とあり。古今著聞集に，カウゾの皮を取りて料紙にすかせ，経文を書き入れ奉るともあり，今こうぞというに同じ。今また按に加宇曾，木加美曾（紙麻）の義にて再転して加宇都とするか……」

また，高尾家文書⁹⁾によると「忌部日驚命鎮座ます高越山は木綿麻山また衣笠山とも云い清

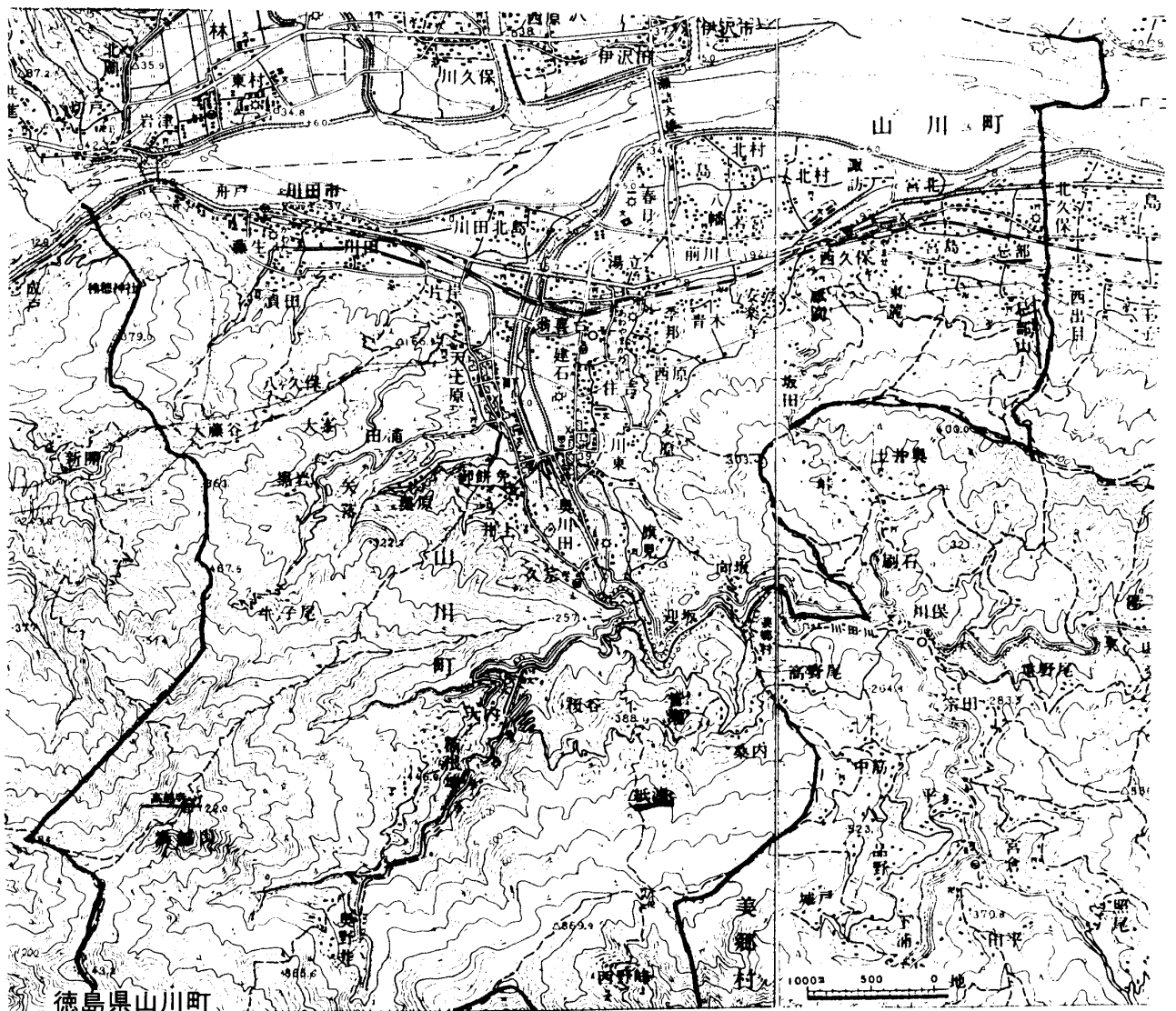
浄潔^{けいせい}斎の地にして、三宝島（仏法僧島）おり万年草を生じ、阿波第一の霊峰たり。ここに於て往昔聖徳太子の命を受け、記和という人紙漉業を掌りしも、尚忌部日鷲命の流れを慕い、今の阿波国へ下り、この楮畑村忌部の頭官衣笠宇内の家に止り、紙漉業を研究し数種の紙を漉出し、それより追々繁昌して、他国にも名ある紙を漉くこととなりぬ」など、この高越山は紙業のこの地に発生したことを裏づけるものとして注目されている。

また、川田町内には次の地名がみられる。

2. 忌部、忌部山の地名がいまに残っていることも紙業発生の古きをとどめている。
3. 紙漉、川田町の南部山間地にある地名で、上古ここにて紙を漉初めしたところといわれる。

以上のほか紙の始源を誇るだけに、紙づくりに関する伝承、あるいは紙そのものについても伝承が残っている。ことに注目されるのは忌部氏が製紙にかかわっていることについてさらに、次の伝承が注目される。

川田邑名跡志¹⁰⁾（鹿兒島政明著）には、「川田の忌部社を種穂社といい、川田邑より、木屋平までの惣名を種穂山と唱ふるも麻穀五穀の種を日鷲神の蒼生にさづけ給いしより唱るとぞ。津咋見



命は百姓の祖神にて、作り喰い見るの御名なり。麻穀を植えし所なる故に麻殖郡とは唱^{とな}るなり、上代に楮を以て紙を漉出し待るも日鷲命、津咋見命の御徳なるべし。別名紙漉の祖神と奉仰御神なり。』

また、さらに同書には、紙と神と同訓なり、麻をもって青幣とし、楮を以て白幣とす。是木綿なり、神体なり。麻穀二物は神代より、木綿及び織布に作り着類に用ゆるものなり。しかるに穀を以て紙を漉くに依って、白幣は紙を切つて作るなり」

5. ま と め

以上の点がわが国における紙づくりは上古神を祭るという儀式の中に、すでに紙が使用され、それが幣となり神のよりしろとしてきたことを明らかなとするのが、その主張の趣旨である。

もちろん、今日上古の時代に紙が使用されて、神のよりしろにしたというも伝承の中にとどまるだけで、史実としては明らかでない。

しかし、現実に史実に残っていないものはすべて虚構だと断定してよいのかどうか。

論者は全国各地に残るかすかすの伝承が、あるいは古代神が単なる信仰の対象として残っているという現実、一考すべき余地があるのではなかろうかと思うものである。

紙の始源を尋ねるとき、それが大陸、半島から伝来したとのみ考える固定概念に抵抗しようとする民族意識のゆえに、日本人が神を祭るとき、神幣を紙でつくったということから、忌部氏と紙づくりを結合させたものである。しかも、神幣は太古の時代、神まつりとともに、すでに存していたと確信するところにその根拠を見出したと考える。

- 3) 徳島県麻植郡川田町忌部地区
- 2) 産業の神々, p.p.36~40
- 3) 産業の神々, p.p.167~173
- 4) 阿波の手漉和紙, p.19
- 5) 同著, p.19
- 6) 同著, p.p.20~21
- 7) 同著, p.p.17~18
- 8) 同著, p.p.16~17
- 9) 同著, p.p.23~24
- 10) 同著, p.p.22~23

参 考 文 献

年表日本歴史, 筑摩書房編
和紙の旅, 寿岳文章著
阿波の手漉和紙, 宇山清人著
産業の神々, 林 正己著